

〔書評〕

A. ゴードン 『日本の200年：徳川時代から現代まで』
 上・下，森谷文昭訳，みすず書房，2006年
 （英文原著2003年刊行）

松葉 正文*

I

本書の原著は、Andrew Gordon, *A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present*, New York/Oxford, Oxford University Press, 2003 である。同書の日本語版である本書を通読した後、評者が抱いた読後感は、有名なハーバート・ノーマン (E. Herbert Norman) の名著『日本における近代国家の成立』(英文原著 *Japan's Emergence as a Modern State: Political and Economic Problems of the Meiji Period*, New York, 1940, 日本語版1947年刊行, 大窪^{おおくぼ}二^じ訳, 『ハーバート・ノーマン全集』第1巻, 岩波書店, 1977年, 所収) の再来, とでもいうものであった。もちろん, 両書が取り扱っている対象, 方法, 時期は, それぞれ異なるが, その学問的成熟度の高さと衝撃力の大きさで, 両書には共通するものがあるように感じたのである。

近年, 日本の近現代史に関して, Andrew Gordon (ed.), *Postwar Japan As History*,

University of California Press, Berkeley, Los Angeles, Oxford, 1993 (アンドルー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』中村政則監訳, 上・下, みすず書房, 2001年); S. N. Eisenstadt, *Japanese Civilization: A Comparative View*, Chicago/London, The University of Chicago Press, 1996 (S. N. アイゼンシュタット『日本: 比較文明論的考察』梅津順一・柏岡富英訳, 岩波書店, 2004年他, 3分冊で刊行中); John W. Dower, *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*, W. W. Norton & Company/The New Press, 1999 (ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて: 第二次大戦後の日本人』三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳, 上・下, 岩波書店, 2001年); Herbert P. Bix, *Hirohito and the Making of Modern Japan*, HarperCollins, N.Y., 2000 (ハーバート・ビックス『昭和天皇』吉田裕監修, 岡部牧夫・川島高峰・永井均訳, 上・下, 講談社, 2002年) など, 外国人による重要な研究成果が相次いでいる。

本書の著者ゴードン氏は, これまでから, その日本近現代史に関する多面的で優れた研究業績によって, わが国でも関連学会を中心に広く知られてきた。この度, 万を持して纏め上げら

* 立命館大学産業社会学部教授

れた本書は、比較史と相互関係史という両方法を駆使し統合して書き上げられた、いわば近現代社会史における最良の研究成果のひとつといってよいであろう。本書評を執筆する前に、Amazonの書籍紹介サイト中のカスタマー・レビューを覗いてみたが、そのなかに「歴史の躍動が伝わってくる面白い通史」「冷静な分析と温かみのある視点の見事に結合した名作」という称讃の言葉が見出された。私も、本書を読了して、同様の印象と感想をもった。

II

本書の構成は、第一部「徳川体制の危機」、第二部「近代革命：1868-1905」、第三部「帝国日本：興隆から崩壊まで」、第四部「戦後日本と現代日本：1952-2000」、の四部十七章からなり、叙述の対象は、日本語版の書名に示されるとおり、幕末以前から今日の日本社会の諸相にまで、文字通り200年間に及んでいる（なお、第2次世界大戦後占領下の日本は、第四部ではなく第三部に配されている。その点については、後に評者の考えを示す）。

本書の長所を、まず一般的に指摘すれば、日本の近現代史200年の歩みを、政治、経済、軍事、社会、文化の各面から、文字どおり全面的に分析し、そして総合していることが挙げられる。そうすることが、歴史学の定石であり常道であると言ってしまうればそれまでであるが、それを現実に実行して成果を世に問うことは容易なことではなく、強い意志と優れた才能に恵まれた一流の歴史家のみがそれを実際になしうるのである。

日本をとりまく国際政治経済情勢の的確な理解と把握；政治権力をめぐる天皇、官僚制、軍

部、政党、議会などの動き；工業や農業の実態と産業構造分析、社会階級と階層の編成と動向、資本家階級と労働者階級、地主と小作人、軍隊および軍事情勢と戦争遂行、近代徴兵制；社会部面での各種結社の動向、労働運動と農民運動、社会運動、女性運動、義務教育の普及と教育制度；そして都市問題と農村問題、ジェンダー問題、環境問題、宗教問題など、歴史と社会を分析するに際して留意すべきほとんど全ての要素と問題が、本書において、論じられそして鮮やかな名文によって総合されている。

繰り返しになるが、歴史学の原則と常識を現実に実行することは容易なことではないし、実行したうえで明瞭な歴史像と歴史認識を提示することは、それ以上に困難なことである。本書の刊行はその優れた成功例となりえた快挙であり、著者ゴードン氏の意欲と能力に敬意を表したい。

つぎに、上記のことと関連し、またその帰結でもあるが、本書においては、広範な諸問題に目配りしつつバランスのとれた叙述を行ない、通説の不十分さを補ったり克服している箇所や、私達がこれまで知りえていたよりもはるかに説得力のある説明を行なっている箇所が、随所に見出される。ここで、その事例の幾つかを、具体的に挙げてみよう。徳川幕府の対外政策を単純に鎖国政策と見ることは誤っており、その他の多様な動向に充分注意を向ける必要があること（35-38、翻訳書のページ、以下同様）；ペリー来航以前における欧米列強の日本に対する様々な動きが丹念に踏まえていること（94-98）；幕末の不平等条約と日本の国民国家形成との相互関係についての適切な評価（101f.）；20世紀初めの地主-小作関係を基軸とした農村地帯とそこでの生活実態についての緻

密な叙述（303-311）；同時期の都市中間層と労働者階級の状態が、女性労働者や非合法下の労働組合、朝鮮人移住者や「部落民」の動向まで含めて活写されている（312-326）；15年戦争へ向う過程で、またその渦中でさえも、日本社会において、ただ伝統的復古的イデオロギーへの回帰が強化されただけではなく、西欧化・近代化の受容がもうひとつの基調として存続していたことについても、浮彫りにされている（423-429）；1980年代以後の日本における戦争責任をめぐる議論の特徴が、新しい国際的条件を踏まえて論じられている（627-629）、等々。

以上挙げたのは、あくまでも幾つかの事例であって、本書の読者は、いずれの時期そしてどのような分野でも、個別の問題が、全体との関係を踏まえ、またそれを意識して、バランス良くそして同時に興味深く論じられていることに気づくであろう。

III

本書の方法的特徴については、著者自身が、次のように述べている。「本書は以下のページで、日本の近現代史が、全世界に共通の近現代史というテーマにかんする一連のバリエーションとして理解可能であるということを論じている。」(vii)「本書のタイトル *A Modern History of Japan*（日本の近現代史）は、近現代性と相互関連性というふたつのテーマの重要性を表現している。本書のような作品には、*Modern Japanese History*（近代日本史）というタイトルをつけるのが普通だろう。そのようなタイトルをつけるということは、日本の特殊性が叙述の中心になることを示唆する、という意味をもたずであり、「近代」と呼ばれている時代にた

またま生じた、特殊「日本的な」物語へと読者の目を向けさせる、というニュアンスをもつだろう。本書は、日本的であることと近代性とのあいだのそのようなバランスを転換したいという狙いから、*A Modern History of Japan* を採用した。ここでは、日本と呼ばれる場でたまたま展開した、特殊「近代的な」物語が語られることになる。[原文段落替] 言い換えると、日本の近現代史は、一貫して、より広範な世界の近現代史と不可分のものだったのであり、したがって、相互関連性が本書の中心的なテーマのひとつでなければならない。」(xxf.)

念のために付言するが、著者は、もちろん、日本近代史の特殊性それ自体を否定しているのではない。どの国の歴史も、他と比較すれば、多少とも特殊なものだからである。著者は言う。「日本の近現代史のそうした特殊な特徴を認識することは重要である。しかし、日本の歴史を比類なくユニークであるとか風変わりであると見なさないことは、研究者にとっても、学生にとっても、それ以上にきわめて重要である。」(xxiii)

こうした著者の分析視角ないし方法は、もちろん本書の全体を通じて、具体化される。たとえば、以下の通りである。「あらゆる近代革命に共通していえることだが、明治時代に起きたかずかずの変化は、進歩と痛みが複雑に混ざりあった遺産を残した。」(240)；「1930年代の日本が直面していた問題は、突きつめていえば、一枚岩的な均質性あるいは封建社会と封建思想に由来する問題ではなく、近代的な多様性および緊張といかに対処するかにかかわる問題だった。」(429)「最後に、近代への不安や、自分の伝統的な本質を失うことへの不安が、日本だけに、あるいは枢軸諸国だけに限定されたわけで

もない、ということ認識しておくことも重要である。事実、そのような不安は、これまでに世界のいたるところで、近代生活を近代生活たらしめる最大の特徴となってきた。戦時の日本も、そのやり方は極端だったし、もたらした結果も稀にみる壊滅的なものだったが、典型的な近代のジレンマのかずかずと格闘していたのである。」(470)；皇軍の「最後の兵士」、小野田寛郎氏と横井正一氏の問題をめぐる日本の議論にふれつつ、「この議論はしばしば、一般化された日本人の人格的特徴と、戦後におけるその変質および凋落をめぐる議論という枠組のなかで展開された。しかしその場合、論者たちは、実際には、日本に固有な問題を論じるというよりも、豊かさの成果はいかに享受され、共有されるべきか、有り余るほど物がふえているのに格差がつづいている時代に、どのような社会的価値観やコミットメントが人々を結びつけることができるのか、という近代性にかかわる、グローバルな問題を論じていたのだった。」(568f)

1950年代以後の世界と日本の政治経済動向について、「学生の抗議行動、女性運動、環境運動は、世界各地でほぼ同時に表面化した。世界じゅうの多くの労働組合は、その立場を、反逆者としての立場から、正統な団体交渉勢力としての立場へ、さらに場合によっては連立政権のメンバーとしての立場へと、シフトさせた。それとほぼ同時に、日本もすでに仲間入りしていた先進資本主義諸国の政府は、中間層にも社会福祉の給付を広げるべく、社会福祉制度の拡充をはかった。日本の政府と市民は、他の国々の政府と市民とおなじように、利潤の追求と、安定的で健康で有意義な生活を送りたいという願いとの釣り合いを取ろうとしたのである。」(613)；「戦後の復興から予想だにできなかった豊

かさにといたるこの歴史は、奇跡と模範の物語だったのか、脅威的な、グローバルな怪物の登場の物語だったのか。それとも、徳の喪失と伝統的価値観の風化にかんする悲話だったのか。これらの見方のすべてが、日本国内で、そして世界じゅうで表明された。そのすべての見方の背後に横たわっているのは、日本を、非常にちがった、さらには独特なちがいをもった場所と見なす、誤った考え方である。日本が味わってきたさまざまな経験は、たしかに興味深いがさほど例外的なものではない、ととらえるべきだろう。日本の経験は、近代性と豊かさとの取り組みという、ますますグローバル化しつつあるテーマの、他とはちょっと趣を異にするひとつの具体的な表われだったのである。」(653)；1990年代以後に日本社会で浮上した「従軍慰安婦」問題、戦争犯罪・戦争責任問題、歴史教科諸問題などにふれながら、それをアメリカでの日本への原爆投下をめぐる議論とも対比しつつ、「近現代史の血にまみれた過去をどのように記憶するかをめぐるおなじような論争は、たしかに世界的な現象だった。」(705f)

さて、ここでは次に、著者の方法と歴史認識を最もよく示すと思われる歴史事象に対する評価についてみておこう。ひとつは、明治維新の歴史的性格に関するものである。著者は、明治維新を「不満を抱いた下層エリートによる革命」(156)と捉え、その主な遂行主体を「新興のブルジョア資本家階級ではなく、侍『貴族階級』の一部」(155)であるとする。(もう少し展開された規定では、「この勤王派の大半は、中層から下層の武士階級出身の怒れる若者たちであり、これに、農村と都市のエリート層のうち国事を憂えて活動していた少数の女性もふくむ多くの草莽の人々が加わっていた」[107]とな

っている。)そして、この「日本型の近代革命はけっしてユニークではなかった。むしろ、日本型の近代革命は、先行する西欧諸国の革命とは対照的ではあったが、それ以後に起きたいくつかの革命とは類似していた」(125)と捉える。また、この「日本の19世紀の革命は、化学反応に喩えていえば、外からもたらされた触媒と国内の諸要素とが強く反応しあった結果起きたのだった。」(40f.)そして、さらに、明治維新が文字通り革命であったことについて、次のように述べる。「1868年の時点のこのような状況を、それからわずか10年後の状況と比較してみると、そのかんに起きた変化は、政治、経済、社会、文化のどの側面からとらえても、息を呑むほど壮絶であり、まさに革命と呼ぶにふさわしいものだった。もちろん、どんな社会も、みずからの過去から完全に自由になれるはずもないし、日本も例外ではない。だが、変革の幅の広さと奥行きの深さは、当時の観察者たちも驚愕したほどのものであったし、150年後に振り返ってもやはり驚異的である。」(124)

もうひとつは、日本帝国主義の形成と展開に係わる部分についての叙述であり、著者の鋭い分析力、広範な視野、バランスのとれた総合力が、いかんなく示されている。(258-260)とくに重要な箇所のみ、ここで引用したい。「軍事的支配と経済的支配は、表裏一体の関係にあった。日本のエリートのすべてと、日本が優れているという観念に強くとらわれた一般民衆は、韓国を、そしてさらに一般的にアジアを、日本にとって力と名声を拡大してゆくためのフロンティアと見なしていた。その意味で、帝国への邁進は、『過剰決定』されていたのである。すなわち、帝国建設への動きは、軍事力、地政学的な競争、貿易と投資の拡大、さらには日本の

優越性を説く土着思想といった、相互に関連する複数の要因を支える論理が絡みあうことによって、推進されたのである。そしてまた、日本を優越視する独断的な世界観は、当時西欧で非常に根強かった人種差別的な考え方と接するなかで、よりいっそう強められたのである。」(260)「明治の支配者たちは、国が進む道としては、帝国となるか帝国への従属か、のいずれかしかなく、中間の道はありえない、とする地政学的な論理を受け入れた。……日本の指導者たちは、そうしようと思えば帝国主義的な利益線の拡大に走らなくとも、近くの国々そして遠い国々との貿易や移民を促進することによって、アジアで国としての独立と繁栄を守りえただろう。だが、それが可能だと信じた指導者は一人もいなかった。他の列強の行動様式も、とうてい日本の指導者に発想の転換を促すようなものではなかった。」(258f.)

日本の帝国主義と大正デモクラシーの評価とも関連した著者の「インベリアル・デモクラシー帝国民主主義」概念も、有益である。「議会制民主主義を唱道した有力者たちは、帝国拡大の強硬な支持者でもあった。戦前の日本では、イギリスやオランダでもおなじだが、政治体制の民主化を支持した人々は、君主への忠誠、帝国の版図の拡大、民衆の政治参加という目的が、たがいに矛盾しないどころかむしろ相互補完的だと信じていた。あとから振り返って、のちの時代の尺度で判断するときにはじめて、これらの目的がじつは矛盾するものだということがみえてくるのである。」(341f.)

IV

全体として、きわめて優れたゴードン氏の著

作であるが、私が疑問ないし疑念を抱いた箇所や論点も、もちろんあった。ひとつは、幕末から明治前半期の日本を、「従属的な半植民地」と規定する点である。代表的な箇所として、「1850年代から1880年代の終わりまでのあいだ、日本は欧米列強に支配される従属的な半植民地だった。」(xxii, 原語は a dependent semicolonial dominated by Western powers, p.xii.) 「半植民地的な地位」(101, a semicolonial status, p.50.) 「半植民地的な従属状態」(109, semicolonial dependence, p.72.) などが挙げられる。幕末・維新期の東アジアにおける国際情勢のなかで、日本が自らの植民地化の危機をいかに回避するかということが、もちろん最大の政治課題のひとつであったことは、事実であろう。そして、幕末に諸外国との間で結ばれた一連の条約が、文字通り不平等なものであったことも、疑問の余地がない。しかし、植民地化の危険性がきわめて大きかったことと、実際に（特定の）外国の植民地となることあるいは半植民地化することとは、もちろん別であり、前者と後者の相違と区別は、冷静に比較考量された上でなされなければならない。その際、最も重要な判断基準は、国家権力を誰が掌握しどのように行使しているか、ということだろう。結論的に言って、私は、この時期の日本を「従属的な半植民地」と規定することは、不正確であると考える。

もうひとつは、日本近現代史の画期に係わる問題点である。長期の歴史的な総括をおこなう場合、もちろん、時代あるいは時期区分、つまり歴史的画期の設定は、本質的な重要性をもつ問題である。その意味で、占領下の日本が、第三部「帝国日本：興隆から崩壊まで」の中に位置づけられていることには、やはり同意できない。そのことに関連して、まず「貫戦的な政治

経済体制」(Ivi, 429, 477) という概念について、考えてみたい。この概念によって捉えられる現実の諸側面が存在することは、おそらく否定できないだろうし、またその必要もないだろう（中村政則『戦後史』岩波新書、2005年、pp.5f, 参照）。しかし、そうした諸側面それぞれの歴史的意義は、あくまで最終的には当該社会の全体構造との関係によって、あるいは関連において、規定されなければならないだろう。たとえば、同じ「貫戦的な」経済組織や労働組織であっても、それが天皇制権力下で戦争遂行のために機能している場合と、戦後の天皇制権力が廃止された後に機能している場合とでは、両者は明確に区別される必要があると思われる。

私には、占領下の日本を第四部「戦後日本と現代日本」ではなく第三部「帝国日本：興隆から崩壊まで」に入れるというこの画期の設定は、著者がアメリカ人であることと無関係ではないように思われてならない。アメリカ（あるいはイギリス）から見た場合、日本の歴史的動向は、この200年間、常に山の上から平野あるいは盆地を眺めるようなものだったに違いない。興隆から崩壊までの帝国日本は、一望される対象だったろう。太平洋戦争期には、実際に戦火を交えるまでに至ったが、それは上記の基本的評価を覆すようなものではない。その帰趨は、アメリカから見れば、常に明らかであった（はずだ）。

日本を内側から見た場合、どうなるだろうか。戦争を遂行しつづける絶対的な天皇制権力が存続している時期とその敗戦後の現実を、同じ時代区分の中に入れるという歴史認識は、成立しようがないだろう。

V

さいごに、本書の対象と課題からは幾分離れることになるが、日本思想史の特質にかんする問題について、ここで言及しておきたい。日本文化の核心ともいべき日本思想の特質ないし特異性のひとつとして、超越的絶対的価値に対する無関心が挙げられる（加藤周一『日本文学史序説』序章参照）。日本文化は、超越的絶対的価値との緊張関係をもたないということを、その最大の特徴としているとあってよい。この点は、ヨーロッパ文明やイスラム文明あるいは中国文明なども明瞭に異なる、日本文明の特異性として確認できるように思われる。おそらく、現代において広く世界に知られた文明のなかで、超越的絶対的価値との緊張関係をもたない文化をもつものは、日本文明だけだろう。

このことから、どういうことが生じるか。このように重大な問題を手短かに論じるようなことは、もちろんできない。しかし、無理を承知で、この点を日本近現代史の歴史的展開にあてはめれば、次のように言うことはできるだろう。日本人は、目指すべき目標やゴールが明確な間はよく頑張るが、その目標やゴール自体をどのように構想し設定するかという局面に立ち至ると、たちまち動揺し、途方にくれてしまうのである。なぜか、超越的絶対的価値との緊張関係をもたない文化のなかでは、価値判断や理念設定そのものが、本質的にまた論理必然的に、困難に陥る他ないからである。

ゴードン氏が言うように、「日本の歴史を比類なくユニークであるとか風変わりであると見なさないことは、……きわめて重要である」（xxiii）が、それでも超越的絶対的価値との緊張関係をもたない文化をもつ国が、近現代において高度工業文明国の一つとして存在していることの意味と不可思議をどう捉えるのか、という問題は残るだろう。

私は、日本の一社会科学研究者として、その問題（の少なくとも一部）を、*The Contemporary Japanese Economy: Between Civil Society and Corporation-Centered Society*, Springer-Verlag, Tokyo Berlin Heidelberg New York, 2001；『現代日本経済論：市民社会と企業社会の間』晃洋書房、2006年；「日本近代史・断想：岩波新書〈日本近現代史〉1～6を読む」『立命館産業社会論集』第44巻第1号、2008年6月、で論じた。ゴードン氏が、この問題についてどのように考えるか、私としては興味がある。

末尾になるが、本書の訳者・森谷文昭氏の努力に対しても、敬意を表したい。「訳者あとがき」にもあるように、本書の翻訳に際し、欧米で発行された通常の英文研究書を翻訳する際には必要とはされないあるいは生じない、様々な苦勞と配慮と工夫が客観的に要求されたであろうことは、想像に難くない。それらを成し遂げて、原著の学問的文学的水準にふさわしい日本語の翻訳文として本書を仕上げられた、その営為と高い翻訳能力に対して、ここで重ねて敬意を表したい。